

2023年4月の総評：木下龍也

んぼ できて
もうすぐわたしは
さくらんぼ／桜咲（千葉県）

最後まで読むと「んぼ」という謎の言葉が「さくらんぼ」の成長過程のひとつを表したものであるとわかり、はっとさせられる。説明されなくとも、ぼ→「んぼ」→らんぼ→くらんぼ→「さくらんぼ」という流れが見えてくるのもおもしろい。例えば、「ぼ ができる」や「らんぼ から」でも音数的にはありだが、やはり、んから始まる言葉のインパクトや、小さな実がぷっくりと世界に姿を見せる様子の語感としても、「んぼ ができる」が正解だと思う。

濁流 全員の中にあなたがいる／合川秋穂（東京都）

激流、ではなく「濁流」。通勤ラッシュの駅などを思い浮かべると、たしかに激しいだけでなく、濁りも感じる。この句の読み方にはふたつあると思う。ひとつは、会う約束をしていて、その人混みのどこかに、実際に「あなたがいる」。だから、その「濁流」に飛び込んでいく力をもらえる、という読み方。もうひとつは、実際に「あなた」はそこにいないが、「濁流」を構成するひとりひとりを、要素として分解したとき、その造形、表情、仕草、服装、髪の色、匂い、声などのいずれかが、必ず「あなた」につながる。だれを見ても「あなた」を思い出してしまう。愛か、後悔か、怒りか、わからないけれども、強い感情がそうさせている。という読み方。他にも解釈はあると思う。いくつかの読み方ができるこの一行は、まさに解釈の「濁流」となりそうだ。

麦茶飲む
チェキが写真を吐くあいだ／有野水都（東京都）

この句における「あいだ」は、現像を待つ数分（ググると約90秒と書いてあるところもあれば、約5分30秒と書いてあるところもあった）ではなく、シャッターを切ってフィルムが出てくる数秒のことだ。おそらく2、3秒。それから数分間、撮ったものがフィルムに浮かび上がるのを楽しみに待つ。例えばYouTubeなら、サムネイルをクリックして、広告を5秒間だけ我慢して飛ばし、本編に入る。この5秒間のような、不要で記憶にも残らず、なかつたことにしてしまうけれど、實際にはある時間。人生の編集が可能ならカットしてしまうであろう「あいだ」。そんなひとときを見事に捉えている句だと思う。「麦茶」と「チェキ」という想像ではなかなか辿り着けなさそうな取り合わせも素晴らしい。

愛されているのに翼が生えている／松下誠一（東京都）

「翼」は自由の象徴であり、人間にはそれがないから憧れの象徴でもある。だから、楽曲にせよ、CMにせよ、多くの場合は「翼」があることのメリット、よろこびばかりが言及される。けれど、この句ではそのデメリット、かなしみについて書

かれている。たしかに「愛されている」場合において、いつでもどこにでも飛んでいけるという選択肢があるのは辛い。そして、自分を愛してくれている相手には「翼」がないのであれば、なおさら辛い。既存の価値観に風穴を空ける1句だ。

サイレンに耳塞ぐ子の髪洗う／杢いう子（佐賀県）

パトカー、救急車、消防車、空襲。何の「サイレン」かは書かれていないが、その音は「子」にとっては聞きたくないもの、こわいものなのだろう。主体（おそらく親）はその「サイレン」に慣れていて、あるいは危険でないことを知っていて、

「子の髪洗う」という日常を進めている。光景としては、お風呂場の日常であるが、そこに「サイレン」という要素を加えることで、親子という関係に未知の側、既知の側という断面を与えていた。575の切れ味と余韻を感じる句だった。

洗い物面倒だからタピオカの ストローで飲むチキンラーメン／夏鈍律（山形県）

「チキンラーメン」を「タピオカのストローで飲む」のは、お箸で食べるよりも「面倒」なはずである。むずかしいだろうし、むせるだろうし、時間もかかりそうだ。けれど、主体は効率の話をしているのではない。気持ちの話をしているのだ。食べる→洗うというふたつの行為を食べるのみにする。食べる、の効率がわるくなつても、洗うがなくなるなら勝ちなのだ。きっと、他人には見せられない、私だけのライフハック。それを書いてくれてありがとうございます。

宮殿に住んでる人しか使わない 長さの充電コードが半額／汐見りら（東京都）

Amazonで探してみると、10mの充電コードがあった。用途は様々だろう。それを「宮殿に住んでる人しか使わない」と決めつけていたのがこの歌のポイントだ。断定のパワーにこちらも巻き込まれて、たしかに「宮殿に住んでる人」しか使わないよな、と思われる。そして、多くの人は「宮殿に住んで」いないから売れ残って「半額」になるのも当然だよな、とも思われる、「宮殿に住んでる人」の生活は想像できないが充電はするよな、と謎の感慨に包まれることになる。幾重にもおもしろい。「充電コード」1本で「宮殿に住んでる人」と市井の人をつなぐ歌。

体重がなくなっちゃって 音楽がきこえきます 行けたら行くね／植村日向（愛知県）

「体重がなくなっちゃって」は身体から魂が離れている状態だろうか。そのときに「きこえ」る「音楽」は死後の世界へとその魂を導くためのものか。あの世で待つだれかへの言葉か、この世で待つだれかへの言葉かわからないけれども、「行けたら行くね」というどっちつかずの常套句は、此岸と彼岸の狭間にある魂の浮遊感そのものもあるよう思える。死に際という重いシーンを軽やかな実況によって捉えてみせた1首。

地図上でポップ体にて飾られた
こころのやまいを打ち明ける場所／マズルカ（山口県）

メンタルクリニック側としては、こわくないですよ、いつでもお話しに来てくださいね、と親しみやすい印象を与えるためのフォントとして「ポップ体」を選んでいるのだろう。けれど、「こころのやまいを打ち明ける」側にとって、そのフォントの印象はあまりにも明るく、そこを訪れる人の心境とは乖離があるのではないか、そこまで思っていなくともなんらかの違和感があった、ということだろう。この違和感のサイズが短歌のサイズにちょうどフィットしている。

奪われて灯籠になる
いれものが
何であってもわたしだからさ／からすまあ（神奈川県）

「わたし」は「灯」である。「奪われて」とあるから、「灯籠」というのは「わたし」が望んでそうなった姿ではないということだ。けれど「わたし」が「灯」であること、「わたし」が「わたし」であることには変わりない。どこに置かれても「わたし」である。外見はどうあっても、内面は変わらない。もし変わったとしても、それもまた「わたし」である。結句のあとに、だから安心してよ、と続きそうな、だれかに宛てた言葉でもあろうし、いつかこれを再読する自身へ宛てた言葉でもあるのだろう。語尾の「さ」が、この歌に軽やかさと爽やかさをもたらした。

以上です。
5月分も楽しみしております。
木下龍也